

## フューチャー・イズ・ワイルド

ドゥーガル・ディクソン & ジョン・アダムス著  
(ダイヤモンド社 2004.1)

ティラノサウルスの復元骨格や冷凍マンモスの頭を見るために、なぜヒトは長蛇の列を作るのだろうか?大きさは風貌だけならクジラやゾウやキリンだってひけはとらない。決定的な魅力はおそらく、彼らがとっくの昔にこの世から姿を消してしまっているところだろう。T-Rexは厳かに、やがてホモ・サピエンスの栄華盛衰物語にも終わりが来ることを語りかけてくる。我々個人の命に限りがあるように、どんな生物もいつかは滅びる。ヒトが絶滅した後、地球の主演は誰が占めるのだろうか?

生物だけではない。大きな自然災害がおこるたびに思い知らされるのは、地球も不変ではないということだ。昨今、地球温暖化が騒がれているが、やがて再び氷河期もやってくるはずだ。そのとき生物はどうなるのだろうか?

本書は、人類が消滅した後の地球に生きる命の物語である。私は先にテレビ番組で「フューチャー・イズ・ワイルド」を体験し、衝撃を受けた。常々、絶滅しそうな生物についてあれこれ考える研究をしているが、これから地球に現れる生物のことなど考えたこともなかったからだ。そして画面に登場する生物の奇抜さにも度肝を抜かれた。2億年後、体重8トンの巨大生物に進化して地上を闊歩しているのも、地球最高の知性の持ち主となり高度な社会生活を営んでいるのもどちらもイカの子孫だとは!しかし、イカに主演の座を奪われたくらいで驚いてはいられない。ヒトの絶滅後、気候と大気の変動を経た1億年後の地球では、細々生き延びていた我々哺乳類の末裔が最後の時を迎える。既に彼らには恐竜絶滅後の主演を務めたかつての繁栄の名残はない。高度な社会生活者へ進化したクモに飼育され、



太らされて餌となる運命にあるのだから。哺乳類がクモの家畜に成り下がっているなんて…

パラバラとページを繰り、CGアニメーションで作成された美しい生態写真を眺めている限り、荒唐無稽な空想物語だと早合点するかもしれない。しかし、一旦解説を読み始めると、登場するすべての生物が進化と生物学の正確な知識に基づき緻密に創造されていることがわかる。それが多くのSF未来小説や怪獣映画と異なる点だ。カミツキガメは未来永劫ガメラに進化することはないが、リクガメからトラトンへの進化には必然性がある。なるべくしてそうなるのだ。

本書は、未来の地球と現存する生物への興味を高めてくれるのはもちろん、「創造」には「想像力」と「知識」の両者が必要なことも教えてくれる良書である。しかも、読後には生きとし生けるすべての物が愛おしく感じられることも間違いない。

著者のひとり、ドゥーガル・ディクソンには、5000万年後の地球に生きる動物たちを描いた「アフターマン」という先行書もあるので、興味を惹かれた方はぜひ一読を。

(法学部助教授 早矢仕有子)

## ■ 自 著 紹 介 ■

### 田村俊子の世界—作品と言説空間の変容



山崎眞紀子著  
彩流社 2005.1

女性の自己主張は嫌われる、という社会的、文化的コードに身をおき、自分がいかに窮屈な思いをして生きてきたかに気づく契機を与えてくれたのが、大学時代に出会った女性作家の書く文学だった。そこには私が日ごろ疑問に思っていることを作品の中に実に大胆に描いていたからだ。以来、私は女性作家作品の明治から現代までの文学史を書き上げることをライフワークとしたいと思い、まず、中核に位置している作家を研究しようと思った。それが、田村俊子(1884~1945年)という作家なのである。

中核であると思った理由は、明治以降の近代小説の文体革命である。擬古文体から言文一致体へ。初の言文一致体小説は二葉亭四迷の「浮雲」だと言われているが、どうもこの文体革命は男性中心になさ

れているぞ、と私は思った。女性による言文一致体の確立はどのようになされたのかと考えてみたときに、そこに田村俊子がいた。また、俊子は現役時代に(亡くなる前に)、小説で生計を立てることができた初めての女性作家である点からも興味深い。

未だ全3巻の作品集しかなく、全集は出たことがない。講談社学芸文庫や岩波文庫は絶版にはなっていないが、品切れ期間が長く、書店に並んでいることも稀である。一般の読者からは無名に近い作家になってしまったが、実は偉大な作家なのである。本書は、最後に上海で客死した彼女の60年の生涯の中の、1903年~1918年という足掛け16年間に発表した作品に焦点をあてているが、彼女の生涯は1918年以降も非常にスリリングである。(法学部 助教授)